

書籍の紹介

裸のフクシマ - 原発 30km 圏内で暮らす -

たくきよしみつ著 講談社、2011 年 10 月発行

著者の鐸木さんは、1955 年福島県福島市生まれ、執筆業、3 月 11 日の大地震発生時には福島県川内村の自宅の近くを雑種犬のジョンとお散歩の途中でした。地震による揺れは、今までに経験したことがない強さと長さで、自宅に隣接した離れがグニャグニャとコンニャクのように歪んで見えたそうです。

川内村は、福島第一原子力発電所から南西方向へ 30km 圏内に位置しており、原発事故による放射線量は部分的に高い場所があるものの、30km 以遠（60km 圏内）の飯館村、川俣町、二本松市などに比べて低い状態にあります。著者の家は震災で停電したものの数分後に回復したそうです。

震災の翌日に 1 号機の爆発の映像をテレビで確認し、インターネットネット不通、放射線被爆への不安、政府報道への不信等のために、独自の判断で川内村を脱出して、川崎市内の仕事場に緊急避難しました。仕事場では震災と原発事故の情報を収集して、放射線量計、ガソリンその他必要な物資を集めて 3 月 26 日に川内村に戻りました。

住民を守る行政の務めは、今回の原発事故においては、放射線被曝を避けるために、放射線量が高い所から低い所に適切に住民を避難誘導することでした。そして、爆発で大量に放出された放射性ヨウ素の内部被曝を低減するために、必要とする人々を特定して速やかにヨウ素剤を服用させることでした。行政は、入手した原子力発電所の事故状況や放射線量の情報をどのように住民に提供して避難誘導等をしたのでしょうか？

「裸のフクシマ」では、福島第一原子力発電所で生じていたこと、放射線汚染の現実、そして行政が行っていたことなどについて、住民の立場から実体験と既往の資料を整理しています。そして、何故、そのような事態となってしまったのか、このような事態を生じた社会システムにどのように対応する必要があるかについて著者の考えを述べております。

本書を通読して、大変良く整理されていると感心するとともに、今回の事故の根底には日本が戦争にのめり込んでいったメカニズムがあると私は感じました。真の豊さを考える上で、重要なヒントが本書にはちりばめられていると思います。内容の細目はここでは記載いたしません、多くの市民にお読みいただければ幸いと思い、御紹介いたします。

「立ち読み版」がありましたので、内容を見たい方は以下のアドレスからどうぞ。

<http://takuki.com/hadakanofukushima.htm>

2012.1.15

不戦兵士市民の会会員 大野幸正